

GS04-1 多施設間における桂皮含有漢方薬服用患者のクマリン摂取量と肝機能への影響の検討

○岩田 直大¹, 貝沼 茂三郎², 窪田 敏夫¹, 小林 大介¹, 内田 愛子¹, 大園 沙保子¹, 山室 雄輝¹,
上田 晃三³, 田原 英一³, 島添 隆雄¹

¹九大院薬, ²九大院医地域医療教育ユニット, ³飯塚病院東洋医学センター漢方診療科

【序論】シナモン（桂皮）の芳香成分であるクマリンは、肝毒性を有するため、欧州では耐容一日摂取量（TDI）を 0.1 mg/kg/day と設定している。これまで我々は、九州大学病院および飯塚病院にてツムラ桂枝茯苓丸加薏苡仁エキス顆粒（TJ-125）が処方された患者を対象に後ろ向き調査研究を行ってきた。しかし、対象患者の多くが桂皮を含む他の漢方薬を併用していた。そこで、両施設間における桂皮含有併用薬を含めたクマリン総摂取量と肝障害との関連性および施設間の差異について検討した。

【方法】2008年4月～2013年3月に TJ-125 が処方された対象患者 61 名（九州大学病院）、68 名（飯塚病院）が併用していた桂枝含有漢方薬のクマリン含有量を HPLC で測定し、クマリン総摂取量を算出した。服用前後での肝機能値変動は有害事象共通用語規準（CTCAE）v4.0 を用いて評価した。

【結果】桂枝含有漢方製剤 33 種類のうち、クマリン含有量が最も高かったのは TJ-125 であった。1 日クマリン総摂取量の中央値は、九州大学病院 0.121 mg/kg/day (0.062-0.541 mg/kg/day)、飯塚病院 0.106 mg/kg/day (0.049-0.326 mg/kg/day) であった。両施設とも桂皮が原因と思われる肝障害はみられなかった。

【考察】1 日クマリン総摂取量は施設間で差がみられたが、ともに TDI を超えていた。しかし、両施設において桂皮による肝機能への影響はみられなかったことから、臨床上漢方由来のクマリン摂取では肝機能への影響は少ないことが示唆された。